

令和 8 年 度 学 校 経 営 計 画

1 学校教育目標

校訓「自立 共生 信愛」を指針として、自主的精神と創造的活力に満ち、たくましく生き抜く、個性豊かな人間の育成を目指す。

「自立」……社会人としてたくましく育つこと

「共生」……多様な人々の中で調和のある社会を築き上げていくこと

「信愛」……豊かな心を育て、互いに敬愛しあう人間関係を形成すること

2 学校の特徴

本校は、定時制単位制でかつ通信制科目も受講できる高校で、普通科（昼間Ⅰ部、昼間Ⅱ部、夜間）と福祉教養科（昼間Ⅰ部）を設置している。加えて、県民カレッジ新川地区センターを併設し、地域の生涯学習の拠点としての役割も担っている。

昼間Ⅰ部、昼間Ⅱ部、夜間の枠を越えた幅広く柔軟な受講選択が可能であり、多彩な科目の中から、生徒は各自の進路目標に合わせた時間割をつくることができる。

多様化する生徒への対応として、習熟度別講座や基礎から発展までの様々な科目の開講、少人数での授業や個別指導、個別の支援計画作成等、生徒一人一人の進路の実現に向けた支援を行っている。

福祉教養科では、介護職員初任者研修の130時間に相当する講座を平成26年度から開講した結果、昨年度まで15名の修了者があった。

部活動では、運動部は毎年のように北信越大会や全国大会に出場しており、文化部は年3回の校内発表を行っている。また、ボランティア活動や校外体験学習も重要な学習と位置づけ、特別養護老人ホーム等と協力した家庭クラブ活動や全校生徒で行う地域環境美化活動等の活動を通して地域に貢献し、地域で育まれる学校を目指している。

さらに県民カレッジ新川地区センターの併設を生かし、高校生が社会人と共に学ぶことにより、大人ひいては地域と関わりながら、共生の心の涵養に努めている。

3 学校の現状と課題

近年、不登校を経験したことのある生徒や様々な悩みや問題を抱えている生徒が増加しているため、スクールカウンセラー3名とスクールソーシャルワーカー1名が配置されている。また、平成30年度後期から自立活動の「通級による指導」が導入され、ソーシャルスキルやコミュニケーション能力の向上を目指した講座「ライフスキル」を開設している。関係教員を中心として、「通級による指導」の指導内容・指導体制の確立を図っている。

進路指導では、従来の指導に加え、多様な生徒の就労に対応するために、入学当初から関係機関とも連携しながら支援をより充実させる取り組みを行っている。現在は確立した支援へのシステムづくりを構築しているところである。

多様化する生徒に多様な学びの機会を保障するため、少人数での授業や学び直しのための学校設定科目「数学入門」などを実施している。また、数学と英語では習熟度別授業も実施しており、今後、このような試みをより広げていく必要がある。

4 学校教育計画

項 目		目 標 ・ 方 針 及 び 計 画	
1	学習活動 (教育課程)	目標	○スクールポリシーに基づき、多様な生徒の実態に対応した教育課程を編成する。
		計画	○生徒の実態に即した指導ができるよう、習熟度別の講座を開設する。 ○生徒の理解を深めさせるために、科目によっては少人数制を展開する。 ○義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための科目を開設する。 ○個々の生徒の進路希望・興味・関心などに対応した受講登録ができるよう多様な教科・科目を開設する。 ○福祉教養科では、家庭や福祉に関する専門的な知識や技術の習得を目指し、多くの専門科目を開設する。 ○通常の指導や各講座における合理的な配慮だけでは十分でない場合の対応として「通級による指導」を開設する。
2	学習活動 (教科指導) 重点 1	目標	○生徒の実態に即した適切な指導と授業改善により、学習意欲や講座出席率の向上を図る。
		計画	○一人一人の生活環境、学習歴、学力、適性、進路希望などを考慮した適切な受講登録を行い、わかる授業を確立する。 ○生徒の出席状況や学習状況について教員間で情報を共有するとともに、保護者との連絡を図りながら、生徒の講座への出席率を高めていく。 ○指導方法や指導体制の工夫改善のために、互見授業を実施したり、I C T機器やデジタルコンテンツ等を活用した授業を推進したりする。
3	学校生活 (生徒指導)	目標	○基本的な生活習慣を培うとともに、互いに敬愛し合う人間関係を構築し、全人的な人間形成を目指す。
		計画	○基本的な生活習慣として「あいさつの推進」「場に応じた言葉遣い」を重点項目として掲げ、ルールやマナーを学び、遵守する力を育成する。 ○不登校や長期欠席の生徒に対して、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー及び保護者と連携を取りながら、生徒の理解・支援に努める。 ○講話等を通してスマートフォンの安全な利用、交通安全、薬物乱用防止への意識を高める。 ○全校集会等を通して、命の大切さに関する意識を高める。
4	学校生活 (保健指導) 重点 2	目標	○生徒の自己健康管理能力を育むとともに、健康で快適な学校生活のための学習環境の整備に努める。 ○特別な支援を要する生徒等の共通理解を図り、生徒の社会的自立や自己実現に向けた指導や支援を目指す。
		計画	○生徒の健康で充実した学校生活のために、定期健康診断や生活習慣チェックを実施し、必要に応じて健康相談を行う。「治療カード」「ほけんだより」により啓発する。 ○生徒保健委員会を活性化させ、生徒の環境整備・健康意識の向上を図る。 ○地域環境美化活動や毎日の清掃を全員で行い、環境美化の意識付けを図る。 ○ケース会議等をもとに生徒への共通理解を深め、家庭や県の相談機関・外部の医療機関との連携を図り、適切な支援を行う。
5	進路支援 (進路指導) 重点 3	目標	○生徒の実態を考慮し、個に応じた進学・就職等を支援する。
		計画	○生徒が個々の適性に応じた目標に向かって、積極的に取り組み、進路実現できるよう支援する。 ○生徒が主体的にキャリア教育のステップアップを目指しながら、目標に向かって実践できる進路指導（支援）体制を構築する。 ○キャリアパスポートの作成を充実させる。

項 目		目 標 ・ 方 針 及 び 計 画	
6	特別活動 重点4	目標	○多様な他者の価値観や個性を受け入れ、助け合ったり協力し合ったり、新たな環境のもとで人間関係を築こうとする態度を育成する。 ○人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度を育成する。
		計画	○生徒会活動や学校行事について、生徒の自主的、自発的な活動を促すとともに、豊かな人間関係を構築する能力やコミュニケーション能力を育て、学校生活の充実を図る。 ○ホームルーム活動について、生徒一人一人がホームルームへの帰属意識や生活上の規範意識を高め、ホームルームが安心できる自分の居場所となり、自己の進路実現へ意欲的に取り組むことができるよう、ホームルーム活動の一層の充実を図る。 ○部活動を通して、個を大切にしながら相互を高め、他者とのコミュニケーション能力や、望ましい人間関係を構築できる能力を育てる。
7	福祉教養科 重点5	目標	○家庭・福祉に興味・関心を持たせ、基礎的な知識や思考・技術を習得させ福祉マインドを育む。
		計画	○家庭・福祉の基本となる生活態度について目標を設定させ、自己評価を行う。 ○福祉施設における福祉体験や学習を通して、家庭・福祉に対する基本的知識や技術を習得させ、専門性を深める。 ○介護職員初任者研修課程や家庭クラブ活動を通して、家庭・福祉に対する興味・関心を向上させる。 ○専門職の外部講師による授業や福祉出前講座、福祉教養科の行事や活動を多く取り入れ、福祉マインドを育成する。
8	生涯学習	目標	○併設されている県民カレッジ新川地区センターとの共学講座で、一般受講者と学ぶ機会を活用し、生涯学び続ける力を育む。 ○県民カレッジ新川地区センターとの学習機会や行事等を活用し、地域の人々と協働的に学び、実社会の課題を解決する資質を育成する。
		計画	○共学講座で、高校生が一般受講者と同じ学習の場で互いに刺激しあい、高めあえる学習環境を整える。 ○新川キャンパスフェスティバルなど、地域での発表機会を充実させる。
9	図書指導	目標	○図書委員会活動を活発化し、読書に対する興味・関心を高める。 ○図書館の利用指導を通し、健全な読書活動の推進を図る。
		計画	○昼休み・放課後のカウンター当番を通して、図書委員としての自覚を高め、図書委員会の活発な活動を推進する。 ○生徒の読書傾向やニーズの把握に努める。 ○図書だより・図書館報の発行、生徒図書選定等を行う。
10	P T A活動	目標	○学校と家庭との緊密な連携のもと、P T A活動の活性化を図る。
		計画	○ホームページにP T A活動の様子などを更新・掲載する。 ○ホームページや安心安全メール等を利用して会員への連絡を徹底する。 ○P T Aだよりを充実させる。 ○P T A講演会、学校開放ウィーク等の保護者の来校機会を多く設定する。 ○積極的なP T A活動への参加を呼びかける。

5 今年度の重点課題（学校アクションプラン）

令和8年度 新川みどり野高等学校アクションプラン — 1 —	
重点項目	学習活動（教科指導）
重点課題	生徒の実態に即した適切な受講登録とわかる授業の確立
現 状	・本校には不登校経験者が多く、基礎学力が定着していない生徒がいる。 ・様々な理由から、転入学生や編入学生が在籍している。 ・進路希望は就職希望から四年制大学への進学まで多岐にわたる。 ・学習への目的意識に乏しく、安易な欠席や遅刻が見受けられる。 ・コミュニケーションが構築できず、グループ活動や意見交換が苦手である。
達成目標	講座出席率と単位修得率の向上
	講座出席率85%以上 単位修得率85%以上
方 策	・不登校生徒や学習習慣が身に付いていない生徒が授業に参加できるように、学校全体で学習の支援にあたる。「わかる」授業・ユニバーサルデザイン化された授業を目指し、授業方法の再検討・改善を図る。 ・多様な生徒のニーズに応じた、弾力的な教育課程の編成に努める。 ・ホームルームや面談を通じ、一人一人の目的に沿った無理のない受講登録を勧める。 ・生徒、教員（担任・授業担当者）、保護者との連携をとっていく。 ・ICT機器活用の推進を図り、タブレット端末やデジタルコンテンツ等を活用した教材開発に努める。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。）

令和8年度 新川みどり野高等学校アクションプラン — 2 —	
重点項目	学校生活（保健指導）
重点課題	保健厚生委員会活動の定着と全校生徒への波及
現 状	・昨年度は「保健厚生委員会活動の活性化」を目標に、年間6回の企画を委員会主体で実施した。 ・「睡眠改善」への意識づけや「ペットボトルキャップ回収箱の設置」をするなど、委員会の主体的な姿勢が育ってきている。 ・現状は委員会内での活動が中心のため、今後は学校全体の取り組みとして定着させるため、発信方法の工夫と参加型企画の拡充が必要である。
達成目標	全校生徒対象の意識調査において、保健厚生委員会の活動に対して「共感できる」「協力できた」と回答する生徒の割合を60%以上とする。
方 策	学校保健委員会で取り上げる健康テーマやゴミ分別、キャップ回収等について、実態調査や集計結果をもとに「本校の現状と課題」を委員会で確認・話し合う場を設ける。その課題に対して「全校生徒が認識して、協力してもらうにはどうすべきか」を話し合い、具体的な改善策（手作りのポスター、放送での呼びかけ、参加型の啓発企画など）を順次実践する。 全校生徒対象にアンケート調査を実施して、取り組みの成果を確かめ、明らかになった課題については啓発方法の改善や活動内容の充実に随時つなげていく。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。）

令和8年度 新川みどり野高等学校アクションプラン - 3 -	
重点目標	進路支援（進路指導）
重点課題	生徒一人一人が主体的にキャリア形成と自己実現を目指しながら、目標に向かって実践できる進路指導（支援）体制を構築する。
現状	本校の生徒は集団および社会的活動の経験値が乏しいことにより、自己理解や自己肯定感が低い生徒が多い。就業体験は生徒にとって自分自身の成果や課題が明確になることで、自己理解および自己肯定感の向上に大きく役立っている。これまで参加した生徒の多くは、進路実現の方向性が定まることで卒業後の目標が明確になったり、本校のスクール・ポリシーの「目標に向かって頑張る」ことへ繋がる貴重な機会にもなったりしている。こうした取組は、今後も地域の事業所と連携しながら学校全体の取組として定着させたい。
達成目標	自分の適性に合った業種や事業所等での就業体験を、卒業年度を迎える前までに経験した上で、卒業年度の就職活動に臨む。 ・卒業予定生（就職希望者）：就業体験の参加率100% ・2年次生：就業体験の参加率90%以上 ・1年次生：就業体験の参加率70%以上 ・1年次生：「みどり野メソッド（ステップ1）」の合格率70%以上
方策	・就業体験を学校全体での取組として職員への周知と協力体制を充実させると共に、生徒への情報提供等の充実を図る。 ・例年実施している「就業体験報告会」を、より効果的になるような実施時期の工夫や内容の充実を図る。 ・特にキャリア推進の対象である2年次生については、進学および就職希望者のほぼ全員を対象に参加を促す。 ・特別支援対象生徒の就労支援についてはこれまでと同様、本人の実態に合った進路実現に繋げられるよう、早期の対応・保護者との連携・実態に応じた就業体験の参加等を、通級担当者や関係外部機関と連携しながら進める。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。）

令和8年度 新川みどり野高等学校アクションプラン - 4 -	
重点項目	特別活動
重点課題	他者や社会との関わりを通して、互いを尊重し、協働しながら課題解決に取り組む生徒の育成を図る。
現 状	・教師の指示を待つ受動的な姿勢が見られることや、他の生徒や集団との関わりが苦手なことから、授業や特別活動を欠席する生徒が見られる。 ・学校行事やホームルーム活動等の集団活動において、他者の生徒と協働しながら自発的に行動する経験が十分でない生徒が多く見られる。
達成目標	様々な特別活動において、生徒が自らの役割を理解し、互いを尊重しながら主体的に協働して課題解決に取り組むとともに、集団の一員としての責任感と自己有用感を高める。
方 策	・学校行事においては、目標や計画を早期に提示することで、生徒が見通しを持って参加できる環境を整える。さらに、準備・運営・振り返りの過程において、生徒自身が計画を確認し、役割を意識して活動できる場面を設定し、参加意識の向上を図る。事後アンケートにより活動の振り返りを行い、次の活動の改善に生かす。 ・生徒会活動や委員会活動における課題について話し合う場を設定し、生徒自身による合意形成を促す。 ・ボランティア活動については、地域や他者との関わりの中で得られる充実感や自己有用感など、活動の意義や魅力を積極的に発信し、生徒が意欲的に参加できる機会を広げる。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。）

重点項目	福祉教養科
重点課題	家庭・福祉に関する探究心を喚起し、実践的な知識・技術の確実な習得を図る。また、他者との関わりや実習など福祉教養科での学びを通して、自己有用感と達成感を高める。
現 状	・家庭・地域における生活体験の希薄化により、家庭に関する基礎・基本が定着しにくく、意欲が乏しい生徒が増加している。 ・教育課程では、様々な家庭に関する専門科目（被服、食物、住居、保育、福祉など）や福祉に関する専門科目を設定し、生徒それぞれの興味・関心や進路希望に対応している。 ・家庭・福祉に関する専門科目において、実習や体験的な学習、生活産業の専門家を招いた授業等を計画的に取り入れ、専門性を高めることができるように取り組んでいる。 ・福祉施設との交流活動など、家庭クラブ活動を継続的に実施している。 ・3年次生を対象に介護職員初任者研修を開講している。
達成目標	指導体制の充実・改善を行い、福祉教養科での学びが自分の成長に繋がっていると感じられる生徒を育成する。
方 策	・専門科目の授業において、外部講師（生活産業や福祉の専門家）と連携した授業や、現場の課題を解決する体験的・探究的な学習を展開し、学びの質を向上させる。 ・家庭クラブ活動や福祉施設での校外実習、福祉教養科合同ホームルーム、福祉教養科出前講座などを活用し、授業以外における実践的な学びの場を拡充する。 ・専門的な知識・技術の習得を基盤としつつ、振り返り（リフレクション）を強化することで、生徒が自ら「学ぶ意義」を再認識し、自己有用感と達成感を高める。 ・介護職員初任者研修の資格取得に向けて、1年次からの早期の意識付けと、職場体験や実技経験を取り入れた学習支援を行う。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。）